

前立腺がんに対する手術方法：
レチウス腔温存ロボット支援前立腺全摘除術（RS-RARP）について

手術支援ロボット daVinci の普及により、ロボット支援腹腔鏡下前立腺全摘除術（RARP）は前立腺がんに対する標準的手術方法となってきました。開腹手術と比べ、出血量が少なく、がんに対する成績もよいといわれていますが、手術に伴う術後の尿失禁の問題は残っています。

レチウス腔温存ロボット支援前立腺全摘（RS-RARP）は、2010年にイタリアのグループが発表した手術方法で、膀胱の後ろ側から前立腺を取り除くといった新しい手術方法です。膀胱の前面を触らないため、従来の手術に比べ手術後の尿失禁が格段に少ないとされています。一方で前立腺を切除した断端にがんが残る可能性（切除断端陽性といいます）が少し高くなるともいわれています。

当センターでは2017年からこの術式を導入しました。これまで同手術を100例近く行ってきましたが、70-80%の患者さんが手術終了1週間後の尿失禁がほとんどない状態となっています。また失禁があったとしても回復が早い傾向があります。しかし、切除断端陽性がやはり少し多くなっています。

この手術の適応となるかどうかは、前立腺がんの部位や前立腺生検でのがん陽性コアの本数、グリソンスコア、前立腺の大きさなどで検討しています。詳しくは担当医に相談ください。

